
Cyborg death god

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cyborg death god

【ZPDF】

Z9632A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

2006年9月下旬！此処、日本に史上最強最悪の殺人鬼現る！
その名も、Cyborg真理絵！

++ プロローグ ++

「見付けたわ。」

突然、背後から少女の声が聞こえた。

男は恐る恐る後ろを振り返る・・・。

グサッ！

振り返った瞬間、男の胸から血が吹きだした。

第1話・殺人鬼現る

夜中、全身血まみれの少女が、一人行くあてもなくさまよっていた。

彼女の名は、奥村 真理絵。史上最強最悪の殺人鬼だ。

が、それを知る者は誰一人いない。

「殺しは楽しい。愉快だ。」

真理絵はそう呟やくと、目にも留まらぬ速さで、その場から消え失せた。

翌朝、新聞に大きく、バラバラ遺体発見、と書かれているのを、真理絵は読んでいた。

「出てるわ！私の活躍が！」

彼女は叫んだ。

「お前、また殺したのかよ？」

唐突に、台所で朝食を作っていた男が、真理絵に言った。

男の名は、黒崎 新一。真理絵の彼氏・・・ではなく、シモベだ。

「お前？」

私を呼ぶ時は、真理絵様、だろ？」

真理絵は新一に、今にも殺す様な態度で言った。

「す、すみません、真理絵様。」

新一は謝った。

が、これで許す真理絵では無かつた。

真理絵は新聞を置むと、すつと立ち上がり、新一のいる台所に入つた。

そして、真理絵は新一の首に腕を巻いた。

「何度間違えれば気が済む！？」

新一は恐怖と焦りに襲われた。

「今度『お前』とでも言つてみる。その時は、お前の首を碎く。」

真理絵は言い放つた。

「気を付けます、真理絵様。」

「

「誓つか？」

「誓います。」

それを聞いた真理絵は、新一を解放した。

「じゃ、あたしはちょっと外出するわ。」

「また殺しですか？」

「そうよ。

今日は、小嶋とか言つうザイ奴を殺すわ。」

「小嶋さんを！？」

「あら？ 何か文句でも？」

「ちょっと、ね。彼女、殺され……ぐつ！？」

突然、新一の背中に激痛が走った。

「お前も死にたいか？」

真理絵は、今にも殺しそうな雰囲気で言った。

新一は脅えながらこう言い返す。

「俺を殺せば、巧い飯が食えないですよ？」

「貴様の代わりはいくらでもいる。

だが、私は貴様を殺す訳にはいかない。後継ぎがいなくなるからな。

「後、継ぎ？」

「いや、何でもない。」

そう言つうと、真理絵は去つていった。

その頃、小嶋と呼ばれる女性は、真理絵に呼び出しを喰らい、とある空き地で待つていた。

「（奥村さん、話があるつて言つてたけど、何なんんだろう？）」

そんな事を思つていると、いきなり何者かに首を絞められた。

「（だ、誰！？）

「さよなら。」

何者かはそう言った。

「（そ、その声、真理絵ちゃん！？）

そう思つた瞬間、小嶋の首の骨が、バキバキッと音を立てて砕けた。

同時に、小嶋は脱力し、息絶えた。

「愉快だわ！こんなに楽しいのは、そう簡単に味わえるものじゃないわ！」

真理絵は叫んだ。

その後、真理絵は小嶋を切り刻み、バラバラにして、人目につきやすい所に捨て、自宅へと帰った。

第1話・殺人鬼現る（後書き）

切り刻むとは・・・。

「お前も切り刻んでやろつか？」

え！？

第2話・殺人鬼脱獄

あれから1ヶ月。真理絵は殺人容疑で逮捕され、刑務所に収容されていた。

「ちよつと看守！私を誰だと思ってる訳！？」
国民的殺人鬼、奥村 真理絵様よ！」

「五月蠅いぞ！連続殺人鬼！」

室外から看守の怒鳴る声が聞こえる。

「真理絵様と呼べ！」

何度言つたら解る！？」

怒鳴る看守に怒鳴り返す真理絵。

「ああああ！五月蠅い！」

突然、同じ牢にいた少年が叫んだ。

真理絵は驚いて振り向いた。

「あなた、何時からそこに！？」

「ずつといたよ！」

それより、もうちよつと静かにして貰えないか？」

「ごめん。人がいたなんて気付かなかつたから・・・。」

「別に良いよ。慣れつ子だし。

所で、あんた何して捕まつたんだ？」

少年はそう言つた後、

「俺は傷害で逮捕された。」「
と付け足した。

「私は連續殺人だよ。」

真理絵は自慢気に答えた。

同時に、少年は隅つこの方に行き、しゃがみ込み、震えてしまった。

「どうしたの？」

真理絵は少年に近寄る。

「く、来るな！」

少年は真理絵に脅えていた。

「私が怖いの？」

真理絵は少年の前で、しゃがみ込んで聞いた。

「た、頼むから命だけは！？」

「待つて！誰も殺すなんて言つてないわ。」

真理絵はそう言つて、少年を落ち着かせたが、頭の中では目の前の少年を殺そうと考えていた。

「本当・・・か？」

「嘘吐いて何になるのよ？」「

「ハハ、そうだよな。」

少年は冷静になると笑つた。

その時、看守が扉を開けた。

「奥村、面会の時間だ。」

「（面会？そうだ、この手があったわ！）」

真理絵は思いつくと、入り口に立っている看守の腹に、パンチを一発くれてやつた。

「うつ！」

看守は口から血を吐いて氣絶した。

「ごめんね・・・。」

真理絵はそう呟くと、刑務所の出口へと向かつた。

そして、難なく脱獄に成功した、かに見えた。

「脱獄だあ！」

刑務所の警官達は一斉に真理絵を囲んだ。

「大人しく戻れ！」

警官達は真理絵に銃口を向ける。

が、真理絵は微動だにせず、ゆっくりと歩き始めた。

「止まれ！」

警官達は叫ぶ。だが、真理絵は止まらなかつた。

「パン！」

遂に、警官達の中の一人が、真理絵に向けて発砲した。

カーン！

真理絵に当たつた弾は、跳ね返つて、銃を撃つた警官に当たつた。
その警官は、その場に倒れた。

「化け物だ！」

皆さん一斉に撃ち込んだ。

一発、二発と、放たれた銃弾は、全て跳ね返り、回りの警官共を傷付けた。

「もう終わりですか？」

真理絵は聞くが、返事は返つて来なかつた。
皆、驚いて固まつていたのだ。

「それじゃあ、今度はこっちの番だ！」

真理絵は、懷から巨大なガトリングガンを取りだした。

一体、そんな物をどうやってしまつていたのか、不思議でしょうがない。

グイーン、ダダダダダダ！

真理絵は、ガトリングガンを発砲し、回りにいた警官共を全て抹殺し、自宅へと帰つて行つた。

こつして、真理絵は刑務所の脱獄に成功した。

第2話・殺人鬼脱獄（後書き）

いきなりこれかよ！？

こんな奴がいたら、人類消滅しちまう。
ある意味、恐怖ホラだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9632a/>

Cyborg death god

2010年10月10日14時28分発行